

「罪人を招く」

2014年07月18日

マルコによる福音書2章13節～17節。「イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集まって来たので、イエスは教えられた。そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、『わたしに従いなさい』と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、『どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか』と言った。イエスはこれを聞いて言われた。『医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。』」

徴税人は罪人と見なされていたため、レビは共同体から排除されていた。深い孤独の中で、魂を失った人のように茫然自失の状態ですら、収税所に座り、主イエスに群がる民衆の騒ぎにも関心を示さなかった。主イエスはレビを見て「わたしに従いなさい」と言われた。この一言によって、レビは自分に目を留め、従えと呼びかけ、人間として必要であると認めている言葉を聞いた。心の空洞が喜びで満たされ、立ち上がり、主イエスに従った。苦渋の中で、一言の言葉と出会った時、前がくっきりと開かれることがある。レビは主イエスに招かれ、それを体験した。彼は喜び、主イエスと弟子たち、また、仲間の徴税人、罪人（重病者）を招き、宴会を催した。経験したことのない嬉しさと楽しさが溢れる宴席となった。これを見た律法学者たちは弟子たちに「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。主イエスに直接言わず、弟子たちに非難の言葉を浴びせている。彼らは「浄、不浄」を律法で識別し、自らは清い者と自認していた。清さを誇る人は汚れた人々を作り出し、彼らと交わらないことによって、清さを保てるとしていた。

主イエスは律法学者たちの非難に対し、医者が必要とするのは丈夫な人ではなく、病人である、私は正しい人ではなく、罪人を招くために来たと言われた。生きる場を失っている人々に、神は「あなたがたを真っ先に受け入れている」と語り、その現実を示された。

前に赴任した教会には、盲人の方、身体的、精神的障がいを持つ方、生活保護を受けている方が大勢おられた。ある方がクリスマス礼拝に初めて見えた。帰る時、私に「教会はめくらとびっこ（本人が言われた言葉通り）ばかりですね」と言った。その方はリュウマチで指が大きく曲がっていた。また、夫が盲人で、本人はカリエスで背中が曲がった病弱な体であったが、命がけで子どもを生み、育てていた女性がいた。彼女は礼拝堂の椅子に座ると、声は出さず滂沱の涙を流された。説教になると昏々と眠った。礼拝が終わると、清々しい顔で帰って行った。主イエスのおられる教会は、今日の御言葉の通り、生きることに苦悩している人々を招くところであると知らされ、多くのことを教えられた。

日本の教会はインテリや恵まれている人が多いと言われている。教会に初めて見えた人が「ここは、私の来る所ではない」と感じることはないか。教会は文化的な社交場ではなく、互いの弱さと痛みを分かち、支え合う群れである。「罪人を招く」という御言葉に答えていくところに主イエスが生きて働かれる教会が建つ。